



筑波大学附属図書館ボランティア広報紙

第21号

図書館の特別展・企画展

目次

図書館の特別展・企画展について	情報管理課 篠塚富士男	1
これまでに開催された特別展・企画展		3
平成9年度：明治のいぶき 黎明期の近代教育 —幻灯・錦絵・教科書— 「明治のいぶき」講演会のお手伝いをして	高田定司	4
平成14年度：「学問の神」をささえた人びと —北野天満宮の文書と記録— 特別展「学問の神」をささえた人びと を見学して	尾崎みち子	5
平成15年度：筑波大学開学30周年（創基131年）記念附属図書館貴重図書特別展 附属図書館貴重図書特別展におもう	高田定司	6
平成16年度：オリエントの歴史と文化 —古代学の形成と展開— 「オリエントの歴史と文化」ミニレクチャーに参加して ミニレクチャーに参加して	島田久美 影山絢野	7 8
平成17年度：江戸前期の湯島聖堂 —筑波大学資料による復元研究成果の公開— 「江戸前期の湯島聖堂」	牧 眞理子	9
平成18年度：中国三大奇書の成立と受容 —『三国志』『水滸伝』『西遊記』はどのように読まれ、描かれたか— 「中国三大奇書の成立と受容 ギャラリートーク」に参加して	飯島倍雄	10
平成19年度：古地図の世界 —世界図とその版木— 筑波大学附属図書館企画展「古地図の世界 —世界図とその版木—」	廣田紀代	11
平成21年度：日光 描かれたご威光 —東照宮のまつりと将軍の社参— 「筑波大学附属図書館特別展」を見て思うこと	高田信江	12
平成23年度：日本人のよんだ漢籍 —貴重本と和刻本と— 日本人のよんだ漢籍 —貴重本と和刻本と—を見て	太田恵理子	14
平成24年度：明治時代に礼法はいかにして伝えられたか —出版メディアを中心に— 図書館特別展「明治時代に礼法はいかにして伝えられたか」を見学して	太田恵理子	15

編集にあたって

筑波大学附属図書館ボランティアは、活動の一環として広報紙「うたがき」を発行しています。

筑波大学附属中央図書館では、毎年秋に貴重書展示室で特別展・企画展が開催されます。ボランティアは展示に関連する飾りを作成するなど協力しています。特別展・企画展は、展示資料や無料で配布される図録が大変興味深く、毎年楽しみです。秋の大学祭の時期に行われる講演会では、中心となって企画された先生から、展示の趣旨・内容の詳しい紹介があります。ギャラリートークでは、実際の展示資料を見ながらエピソードを交えての説明を聞くことができます。本号「うたがき」第21号は、特別展・企画展の特集号です。展示の概要と感想を、展覧会図録及び附属図書館ボランティア同士の意思疎通のために毎月発行している「図☆ボラの会」会報から抜粋・転載して編集しました。

広報紙「うたがき」は第17号から筑波大学附属図書館のボランティアのページで公開されています。私たちボランティアの活動をより広くより多くの皆さんに知っていただければと願っています。筑波大学附属図書館ボランティアの活動に興味をもたれた方々のボランティアへの参加を歓迎します。

広報部員一同

図書館の特別展・企画展について

情報管理課 篠塚富士男

図書館では、原則として毎年秋に特別展・企画展を行っています。「明治時代に礼法は
いかにして伝えられたか—出版メディアを中心に—」と題する特別展をこの10月に開催し
たのは記憶に新しいところですが、ボランティアの皆さんには、観覧者へのお土産用とし
て展示内容にちなんだ折紙を提供していただいたり、立派な盆栽をお借りしたりと、今回
も様々なご支援をいただきました。そこで、この機会にミニクイズを通して特別展・企画
展の歴史を振り返ってみたいと思います。

<特別展ミニクイズ>

①特別展はいつごろから始まったのでしょうか？

②特別展・企画展と、展示会の名前を使い分けているのはなぜでしょう？

③これまでに一番入場者数が多かった特別展の入場者は何人くらいだったでしょう？

紙面の都合もありますので（笑）、早速お答えしましょう。

まず①ですが、現在のようなスタイルの展示会の始まりは平成7（1995）年6月1日か
ら6月8日まで開催した特別展「天正少年使節と『原マルチノの演説』」でした。これはこ
の年3月の中央図書館新館増築完成を記念して開催したのですが、奇しくも同じ平成7
年6月にボランティアも活動を開始しています。すなわち中央図書館新館と特別展、それ
にボランティアが、同じ年から歴史を刻み始めた、ということになり、当館の歩みを振り
返ると平成7年というのは大きな意味を持つ年であったといえるでしょう。特別展はこれ
以降、中央図書館の耐震改修工事のため貴重書展示室が利用できなかった平成20年を唯
一の例外として、原則として年1回（平成8年のみ2回）開催しています。

次に②です。特別展の歴史を見ていくと、平成18年度と19年度の展示会だけが企画展
という名称になっています。これは平成17年に発足した研究開発室のプロジェクトの一
つとして「附属図書館企画展の実施」が提案されたため、図書館と研究開発室との連携の
もとに「図書館主体」の展示会として開催されたことによるものです。

研究開発室発足以前にも図書館が企画し開催した展示会は何回かありました。また、学
系・研究科等の学内の教育研究組織との共催による展示会もありましたが、これらを名称
で区別することはせず一律に特別展と呼んでいました。しかし、展示会の開催が研究開発
室のプロジェクトとして位置づけられることになったため、学内共催組織から図書館に企
画が提案されたもの（持ち込み企画）を特別展と呼び、図書館が企画したものを企画展と
呼ぶこととしました。このことの意味について、18年度の企画展（「中国三大奇書の成立
と受容」）の「ご挨拶」において、当時の植松附属図書館長は大略次のように述べています。

- ・「特別展」は、これまで学内の教育研究組織の支援を得て附属図書館と当該組織との
共催の形式で開催してきた。教育研究活動の成果と、附属図書館の所有する貴重書を
中心とする資料展示との連携は、毎回学内外からの多数の来場者に高い評価を得てき
ている。
- ・今回は、これまでの「特別展」とは趣を変えて、附属図書館と研究開発室とが共同で
「企画展」を開催する。図書館主体の企画であること、貴重書だけではなく基本書を
中心とした構成であることが特徴である。（基本書は）本展示会が終了すれば館内の

所定の書架に戻され、閲覧や館外貸出にも供せられる。

- ・この企画展を通して、利用者にあまり知られずに眠っていた資料、手に取られることの少なかった書籍が日の目を見て、活発に利用されれば幸いである。

これにより、図書館がテーマを自由に設定してストーリーを作成し、そのストーリーの展開に即した形で展示資料を選ぶ、という方法を前面に押し出すことが可能になりました。そのため、「貴重書展示室」を会場としながらも、必ずしも貴重書中心の展示にこだわる必要はなくなり、ストーリー展開上の必然性があれば、どんな資料でも（たとえばマンガでも）展示することが可能となって展示の幅が広がりました。しかし、これはもちろん「学内の教育研究組織との連携による教育研究活動の成果に基づく貴重書を中心とする展示」という従来の特別展のスタイルを否定するものではありません。常設展のほかに、特別展と企画展という性質の異なる展示会の方法を確立することによって、その時々状況に応じて柔軟に様々な展示会を企画・開催することが可能となり、図書館展示の可能性が一層拡大しました。これ以降、学内から展示会共催の要望があればそちらを優先する形で展示会を企画してきましたが、ほぼ毎年学内からの要望がありましたので、21年度以降は特別展の形で展示会を開催しています。

最後に③です。平成7年から今年まで18回の特別展・企画展を開催してきましたが、入場者数のベスト5は以下のとおりです（カッコ内が入場者数です）。

1. 平成12年度特別展「日本美術の名品」(4,333人)
2. 平成9年度特別展「『明治のいぶき』黎明期の近代教育」(3,822人)
3. 平成18年度企画展「中国三大奇書の成立と受容」(1,800人)
4. 平成17年度特別展「江戸前期の湯島聖堂」(1,780人)
5. 平成19年度企画展「古地図の世界」(1,708人)

これは入場者が自分でカウンターを押した数をそのまま使っているもので、正確な入場者数ではありません。しかし大まかな傾向はつかめると思います。簡単にみていきましょう。

1位の「日本美術の名品」は探幽等の屏風が図書館で「発見」され初公開された特別展で、社会的にも反響が大きかったものです。当時の学長は北原保雄先生でしたが、北原先生は附属図書館長から学長になられたので、この特別展にも非常に関心を持っておられ、率先して取材等に応じられていたことを思い出します。2位の「明治のいぶき」はわずか6日間の開催でしたが、これは特別展の歴史上、唯一学外（丸善・日本橋店）で行われたもので、図書館ではなく筑波大学の主催という形をとりました。東京・日本橋という地の利や江崎玲於奈学長の著書のサイン会等もあり、短期間に多くの入場者がありました。

3位と5位には企画展がランクインしていますが、館内のワーキンググループのスタッフが、それぞれの創意工夫で主体的に企画に関わり、自由に展示会を創りあげたことが結果として表れているのはとてもうれしいです。4位の「湯島聖堂」は1位の「日本美術の名品」の成果をさらに発展させて、湯島聖堂の礼拝空間の復元という意欲的な試みを行った研究成果の発表の場としての特別展でした。この成果はさらに平成19年に「孔子祭復活百周年記念事業」として湯島聖堂で開催された展示会（斯文会と筑波大学の共催）に受け継がれましたが、特別展が発端となって次々に研究が深化し、さらにその成果を展示会の形で継続的に公開する、という理想的なモデルとなっているものと言えるでしょう。

これまでに開催された特別展・企画展

- 平成7年度特別展：天正少年使節と『原マルチノの演説』
- 平成8年度特別展：宇野文庫展
- 平成8年度特別展：幕末・明治の生活と教育 —写真・幻灯・錦絵・教科書—
- 平成9年度特別展：明治のいぶき 黎明期の近代教育 —幻灯・錦絵・教科書—
- 平成10年度特別展：近代教育学の源流 —コメニウスからフレーベルまで—
- 平成11年度特別展：身体と遊戯へのまなざし —日本近代体育黎明期の体操伝習所
(明治11-19年) —
- 平成12年度特別展：筑波大学附属図書館所蔵 日本美術の名品 —石山寺一切経、狩
野探幽・尚信の新出屏風絵と歴聖大儒像—
- 平成13年度特別展：日本古代の学問と萬葉集
- 平成14年度特別展：「学問の神」をささえた人びと —北野天満宮の文書と記録—
- 平成15年度特別展：筑波大学開学30周年(創基131年)記念附属図書館貴重図書特別展
- 平成16年度特別展：オリエントの歴史と文化 —古代学の形成と展開—
- 平成17年度特別展：江戸前期の湯島聖堂 —筑波大学資料による復元研究成果の公開—
- 平成18年度企画展：中国三大奇書の成立と受容 —『三国志』『水滸伝』『西遊記』はど
のように読まれ、描かれたか—
- 平成19年度企画展：古地図の世界 —世界図とその版木—
- 平成21年度特別展：日光 描かれたご威光 —東照宮のまつりと将軍の社参—
- 平成21年度特別展：筑波大学附属図書館所蔵 連歌俳諧貴重書展
- 平成22年度特別展：慈雲尊者と悉曇学 —自筆本『法華陀羅尼略解』と「梵学津梁」の
世界—
- 平成23年度特別展：日本人のよんだ漢籍 —貴重本と和刻本と—
- 平成24年度特別展：明治時代に礼法はいかにして伝えられたか —出版メディアを中心
に—

特別展・企画展の図録は [電子展示のページ](#) で公開されているので参照されたい。

平成9年度特別展：
明治のいぶき 黎明期の近代教育 —幻灯・錦絵・教科書—

平成9年8月4日（月）～8月9日（土）
丸善・日本橋店 4F ギャラリー

この特別展は『前年11月3日の文化の日を中心に、つくば市の本学附属図書館貴重書展示室において実施した特別展「幕末・明治の生活と教育」が大変好評で、その折、このような資料をより広く多数の人々に見せて欲しいという、学内外の希望が強く寄せられたことに応えるために企画したもの』（筑波大学附属図書館長（当時）斎藤武生「御挨拶」より）であり、『明治初頭の学校教育をテーマとし、明治5年学制施行から明治23年頃までの資料200点を展示し（中略）、とりわけ文明開化期の、覇気に富み、自由・闊達に行われた教育の様子を、当時使われた教育錦絵・教育絵図・双六などの教材』（ibid.）などで展覧した。展示の「立版古」づくりにはボランティアが協力した。展示資料のうち、明治期の刊行物は主に宮木宥弑氏より寄贈された宮本文庫から、江戸期の往来物は東京文理科大学教授であった乙竹岩造の蒐集による乙竹文庫から選定された。

「明治のいぶき」講演会のお手伝いをして

高田定司

筑波大学附属図書館特別展「明治のいぶき 黎明期の近代教育 幻灯・錦絵・教科書」が8月4日から一週間、丸善日本橋店4F ギャラリーで丸善協力のもとに催され、多くの方々の参観を得て成功裏に終了したことを心からお喜び申し上げたい。なおこの特別展の参観者総数が私学の慶応、早稲田の場合を上回ったと言うことで筑波大学関係者は大変な喜びようであった。

この特別展を記念して、初日4日の午後2時から学長江崎玲於奈先生と教授山本恒夫先生の特別講演が第二丸善ビルにおいて催された。学長江崎玲於奈先生の演題「発見の心」で、先生の若い頃の経験を話された。真空管の限界を見つめ、新たな展開を半導体に見出された着想の飛躍について、この「着想の飛躍」こそどの分野においても新たな発展を達成するのに大切であると説かれたのが印象的であった。

山本恒夫先生の「明治—庶民娯楽と学習」では明治時代の庶民の娯楽について、特に落語、講釈、浪花節、幻灯などいろいろと興味ある話をされた。大正末期に関西の田舎に生まれ、昭和初期に物心ついた私にとっては子供の頃の経験とダブるところが多かった。よく「明治は遠くなりにはけり」などと云われるが、私にとっては「年をとるにつれ明治は近くなりにはけり」である。ならば江戸末期と明治とは庶民の娯楽に断絶があったのか、いややはり大方は連続していたに違いないと思ったりしている。何の検証もないが・・・

今回の特別展でお年を召した方々の参観が多かったと聞くが、明治をもっと身近なものとして捉えておられたのかも、あるいは明治へのノスタルジアか。

今回、微力ながらこの記念すべき行事に協力することが出来て喜んでいいる。ボランティアの皆さんご苦労様でした。

平成 14 年度特別展：
「学問の神」をささえた人びと —北野天満宮の文書と記録—

平成 14 年 12 月 2 日（月）～12 月 18 日（水）

この特別展は筑波大学歴史・人類学系と筑波大学附属図書館の共催で開催された。筑波大学の日本史学の伝統は古く明治にまでさかのぼるが、前身校のひとつ、東京文理科大学の初代学長 三宅米吉博士によって、その後の発展の確固とした礎が築かれた。

菅原道真を祭神とする北野神社（北野天満宮）伝来の文書群が、京都の北野天満宮が所蔵するもののほか、京都大学・筑波大学・東京大学史料編纂所に所蔵されている。筑波大学に伝来する北野神社文書の大半はかつて北野神社の三祠官家の一つで神事奉行を務めた松梅院が所蔵していたものである。昭和 20 年代の初め、東京文理科大学国史学研究室の教官らが発見し、購入されたものと伝えられる。主要な展示資料は北野神社関連資料（至徳三年足利義満御判御教書、長享元年足利義尚御判御教書、北野社家日記など）、東寺関連資料（東寺凡僧別当引付など）、香取文書（大宮司家文書）である。

特別展「学問の神」をささえた人びと を見学して

尾崎みち子

天神様が日本発のフランチャイズだったとは……。

不遜ながらこれが特別展での私の感想であった。自分の死後各地に学問の神様として奉られ敬われていた道真にとっても松梅院（商売院ではない）のビジネス上手は一枚上手だったかも。

特別展で偶然にもこの展示の担当の先生にお話を伺うことができました。

天神様が各地に建立されたいきさつ、そして道真の怨霊を鎮める目的で造られた北野神社がいつしか政治的パワーの強い勢力、松梅院が将軍の力を利用することで各地に天満宮を建立していったことは正にフランチャイズ方式といっても良いのではないのでしょうか。しかも各地の天満宮は随分と賑わっていたそうです。又道真が中央権力の政治アドバイザー的存在として栄華を誇るが又それが災いして陥れられ失意の内に亡くなるというのも何かいにしえの話ではないような気がします。私の頭の中には竹中平蔵氏の姿がだぶつくのですが（竹中氏は今も頑張っております）。それにしてもこの時代にも時の権力者に進言できる人物がいたとは驚きです。道真の悲劇は時代より少し早く生まれてしまったことにあるのでしょうか。

そろそろまた受験シーズンがやってきます。受験生は天満宮に詣で絵馬をかけ合格の祈願をすることでしょう。政治に翻弄され学力の低下が心配されている今日、学問の神様道真公もさぞかし草葉の陰でこの国の将来を託すべき子供達を心配しているに違いない。

道真様、あなたが今生きておられたら何と文部科学省に進言していただけますか。

平成 15 年度特別展：
筑波大学開学 30 周年（創基 131 年）記念附属図書館貴重図書特別展

平成 15 年 9 月 29 日（月）～10 月 10 日（金）

筑波大学附属図書館の貴重図書・準貴重図書は、筑波大学としての書籍収集の結果であると同時に、明治 5（1872）年開設の師範学校以来の前身校の蔵書を引き継いでいることから蔵書構成には必然的にこれらの前身校の性格と歴史が反映されており、和書では文学・言語、歴史、教育等の分野に、洋書では文学、教育、哲学等の分野に及んでいる。

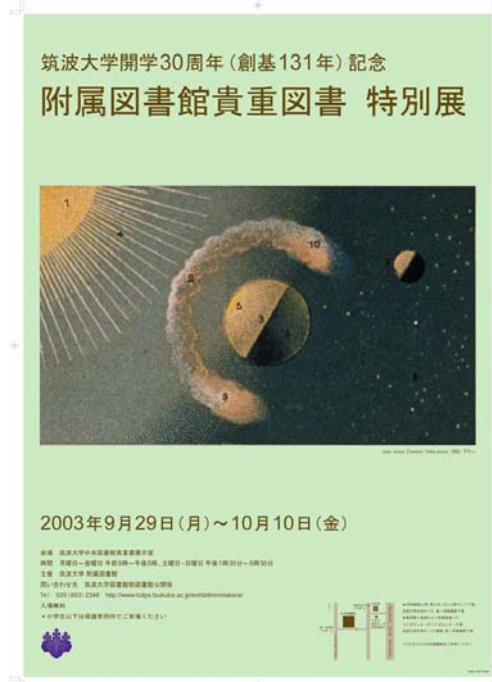
これらの書籍およびその複製の一部はこれまで中央図書館貴重書展示室における常設展示等でも公開されてきたが、今回は筑波大学開学 30 周年を記念して、古代からの日本の学問と文学、および近代ヨーロッパの知を映す貴重図書の中から主要なものが展示された。

附属図書館貴重図書特別展におもう

高田定司

従来の貴重図書展示は骨董品の意味合いが濃く、又展示品の説明は専門的で素人の参加者にとっては難解だった。その貴重書がどれだけのインパクトを当時または今日にもたらしているのかよく解らなかつた。今回は開学 30 周年を記念して、多くの方に見てもらえるような配慮をし、特に展示そのもの、印刷された展示図録、電子展示の公開の 3 つが一体となる構成とすることである。果たしてどんな展示になるのか、参加者がその展示に参加できる、いわゆる参加型展示になるのではと期待している。

コメニウス「世界図会」：今回のポスターの絵はこの図会の中から引用したものである。恥ずかしながら、どんなものか予備知識がなかつたので世界百科事典（日立デジタル平凡社）を覗いてみた。それによると「感覚的具体的事物から出発して抽象的概念の理解へ進むこと、言語を事物認識と結合して教えることという方法原理に基づいて作られている」とか。そして「絵に描かれた事物に文字を対応する形で示すことによって、自然と文化に関する百科全書の知識をすべての人に近づきやすいものにしようとした。これは知識人階級における文字と大衆における絵という、コミュニケーション史上異なった系譜をなす二つの媒体を教育的に統合する試みとして画期的であり、今日の視覚教材の先駆となった」と。展示予定の貴重図書（色んなトリックが本の中にある）と日本語解説書を見せて貰った私にはこの解説になるほどと納得。文字と絵とは当然の事柄として我々の認識のなかで一体化しているが、昔はそうではなかつたらしい。今はデジタル、AV の時代、新たなる認識形態融合が芽生えているのではと思う。



グーテンベルク 42 行聖書：グーテンベルクは活版印刷の開発者の中の少なくとも一人であるとされている。上下巻全部で 1300 ページの大作は見事なもの。ふたたび世界百科事典によると「それはゴシック書体の傑作であるうえに、いずれの点からみても非の打ち所のない活版印刷の最初の本であり、人はその語間から発する精神に、読む以前すでに打たれたという」とある。私も本図書館所蔵の復刻版を見て、その装丁の見事さ、デザインのカラフルなこと、それだけで中身はどうであれ、簡単に打たれてしまった。グーテンベルクはこの印刷技術開発のため資産家フストから借金をしたが返済出来ず、契約を解消され事業はフストに移ったとか。しかし聖書の出版はつづけたが、貧困のなかで亡くなった。新しい分野の開拓者は時として不運を経験することがある。彼の印刷技術は大きな成果を後世に残したのだが。

平成 16 年度特別展：オリエントの歴史と文化 —古代学の形成と展開—

平成 16 年 10 月 25 日（月）～11 月 5 日（金）

筑波大学が所蔵する古代オリエント学関係図書は東京教育大学において文部省の助成を受けて行われた研究プロジェクトに端を発している。「西洋古代文化の没落過程の研究」と題するこのプロジェクトにより、古代オリエント学、ギリシャ古典、科学史・美術史の基本図書、中世の教父全集等々の大冊が揃えられた。以後、30 年間継続したこのプロジェクトの中心メンバーのひとり、杉勇教授は日本の古代オリエント学の草分け的存在で、特に古代オリエント学に関する文献を集中的に購入し続けた。こうして収集された図書は筑波大学の古代オリエント学関係図書の基礎となっている。

展示は 第 1 部：アッシリア学（楔形文字文書を研究する学問）

第 2 部：旧約聖書・ユダヤ教

第 3 部：エジプト/ペルシア/ギリシア・ラテン/シリア/オリエント教父

という三部構成でなされた。

主要展示書目

・シャンポリオン「古代エジプト人の聖刻文字体系提要」・レプシウス編「エジプトとエチオピアの記念物」・旧約聖書「アレppo・コデックス」「レニングラード・コデックス」
・「死海文書」・「バビロニア・タルムード」・ギリシア語旧約聖書「シナイ・コデックス」
・（ホメロス）「イリアス・アンブロジーナ」・ベディヤン編「殉教者・聖人行伝」

「オリエントの歴史と文化」ミニレクチャーに参加して

島田久美

図書館の特別展企画として行われる、『オリエントの歴史と文化』のミニレクチャーに参加しました。講師の秋山学先生による講義が 2 時間行われました。多くのボランティアの方々が参加されて、先生のお話に関心を持って耳を傾けました。

筑波大学附属図書館には、東京教育大学の時代を含めてオリエント学の関係文献が多く蓄積されていて、世界でも数少ない貴重な文献も多くおさめられているそうです。今年の特別展では、山田重郎先生・池田潤先生・秋山学先生を中心に大学院の方々の協力を得、

象形・楔形文字の解読を果たした古代学の資料を、3部構成で公開されるそうです。

彩色画だけが切り取られて残った文献の話や、旧約聖書とユダヤ教が繋がっていた事、また、二人で取り扱わなければならない大きな本を展示することなど、興味を引くお話が続きました。その中で印象に残ったのは、オリエント諸語の数の多さとそれぞれのつながり、そして解読です。一つの言語を解読するには、想像出来ないほどの労力や忍耐、そしてひらめきが必要だったのではないのでしょうか。

専門の先生からお話を伺えたことで、特別展の開催が待ち遠しいです。

ミニレクチャーに参加して

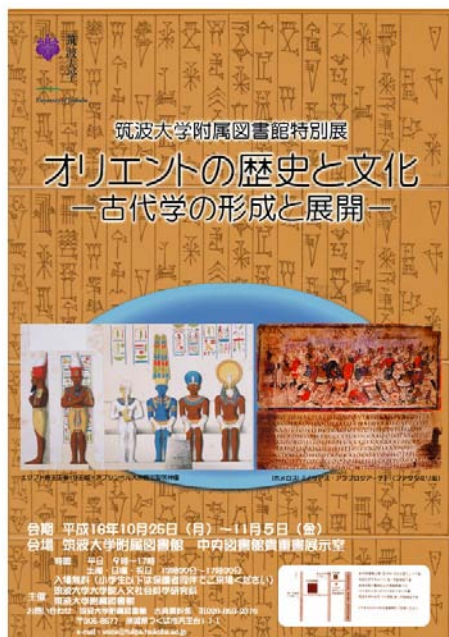
影山絢野

10月13日、筑波大学大学院人文社会科学研究所と筑波大学附属図書館の主催する特別展「オリエントの歴史と文化—古代学の形成と展開—」(10月25日～11月5日開催)のミニレクチャーに参加しました。特別展の概要と目的、古代学の研究方法、展示書目について人文科学研究科の秋山学助教授が丁寧に解説してくださいました。

筑波大学の所蔵する古代オリエント学の研究資料を〈アッシリア学〉、〈旧約聖書・ユダヤ教〉、〈エジプト、ペルシア、ギリシア・ラテン、シリア、オリエント教父〉の三部構成で展示し、どのようにして古代学が成立してきているか、その流れを見ていくことが出来るということ、また、大学ではオリエントにエジプトやメソポタミアなどの東方と呼ば

れる地域だけでなく、ギリシアやローマという西方も対象領域として扱うということ、さらに数少ない貴重書も出展されるということでした。

大変多くの方がこのレクチャーに出席し、熱心に耳を傾け、積極的に質問をされていました。私も配布された詳細な資料と、スライドに映されたはっきりとした彩色画を見ながら、終始胸が躍っていました。とても楽しいレクチャーでした。特別展が待ち遠しいです。



平成 17 年度特別展：
江戸前期の湯島聖堂 —筑波大学資料による復元研究成果の公開—

平成 17 年 10 月 8 日（土）～10 月 30 日（日）

筑波大学には、明治五年開設の師範学校以来引き継がれ保管されてきた貴重な資料が多数蓄積されている。それは、主に本学の前身が湯島聖堂址に設置されたことに由来する。

そのひとつが湯島聖堂ならびに昌平坂学問所の資料群である。

本特別展は、上記伝統的収集品のうち美術的・歴史的に価値のある湯島聖堂関係資料ならびに聖堂の礼拝空間を復元するための調査研究という新たな視点を生かした復元制作とその研究成果を併せて展示したものである。

また、本展示は筑波大学附属図書館と創設 30 周年を迎えた芸術専門学群との共同開催で行われた。

「江戸前期の湯島聖堂」

牧 真理子

毎年秋頃にかかれていた筑波大学附属図書館の特別展、今年のテーマは「江戸前期の湯島聖堂」でした。今回は筑波大が所蔵する貴重資料の展示だけでなく、“甦るイメージ、草創期の湯島聖堂”ということで、その関係資料から聖堂内部の礼拝空間を推察し復元した CG 画像や孔子像等聖像の復元作品なども合わせて展示され、資料を活用した復元研究の成果として公開されました。復元制作担当の先生方によるギャラリートークも行われ、制作過程の様子なども含めて詳しくまたわかりやすくご説明いただきました。

湯島聖堂はもともと上野忍岡の林羅山邸内にあった孔子を祀った聖堂が林家の家塾とともに神田の湯島に移され、そう称されるようになったそうです。のちにこの家塾は江戸幕府直轄の昌平坂学問所となります。そして曲折を経て東京高等師範学校、東京文理科大学となり、戦後には東京教育大学、その二十数年後に筑波大学となり今に至っています。なる



ほどこの歴史的背景により、筑波大には湯島聖堂の美術資料や昌平坂学問所の関連資料などが多数伝来されているのだと改めて知ることとなりました。さらには

2000年に開催された特別展「筑波大学附属図書館所蔵日本美術の名品」、この特別展開催にあたり、準備のため行われた調査の過程で狩野探幽筆「野外奏楽・猿曳図」屏風等などが発見され、そのことが後の湯島聖堂研究のきっかけとなり、そして今回の特別展へと繋がっているということ、このことにより益々私の興味は膨らみました。筑波大学と湯島聖堂を結ぶ歴史の流れに乗り、江戸時代にタイムスリップしたようなそんな感覚の残る今回の特別展でした。今後のさらなる調査研究にも期待したいと思います。

平成 18 年度企画展：中国三大奇書の成立と受容
— 『三国志』『水滸伝』『西遊記』はどのように読まれ、描かれたか—

平成 18 年 10 月 2 日（月）～10 月 27 日（金）

この企画展は、筑波大学附属図書館所蔵の資料を交えながら、中国三大奇書の中国での成立と日本での受容につき企画展示したものである。

400 年前の江戸時代に中国からもたらされ、今なお多くの人に愛読されている『三国志』、『水滸伝』、『西遊記』を私たちは「中国三大奇書」と呼んでいる。

展示は、「第 1 部 中国での成立」、「第 2 部 日本での受容」、「第 3 部 子どもから大人まで」、「第 4 部 特別コーナー」で構成されている。

すなわち、三大奇書が中国で成立し、どのように日本に入り、どのように読まれかつ独自の文化として発展していったのか、更にそれが新しい文化としてメディア（映画、マンガ、小説など）を通して、国内外に発信されていったのかを解明している。

「中国三大奇書の成立と受容 ギャラリートーク」に参加して

飯島倍雄

10 月 3 日（火）午後 1 時半から和装本閲覧室でボランティアの人達のために、本学大塚秀明先生を講師（本企画展主催者の 1 人）に標記ギャラリートークが開催された（ボランティア 17 名に図書館関係者が参加）。私もその 1 人として拝聴させてもらった。

大塚先生から企画展開催までのいきさつや図録作成裏話、展示閲覧の見所を説明していただいた後、参加者全員で企画展を興味深く見せて貰いながら画廊談義を聴き、更に、『三国志』の名言等の話をうかがった。1 時間半の時間は、あっという間に終わった。

中国で奇書と言えば、『三国志』、『水滸伝』、『西遊記』、『金瓶梅』を指すが、今回は『三国志』、『水滸伝』、『西遊記』につき筑波大学図書館にある基本書を中心に、中国でどのように生まれ、長い年月をかけ大衆の間で文学・文芸として育まれていったのか、日本に何時頃渡来し、どのように大衆に受け入れられ日本独自のものとして発展していったのかという内容を中心に講演は進められた。この中で、私が最も印象に残った点や感想をまとめてみた。

中国では、たとえ架空の小説や物語であっても、史実の年代が示されているとのことで、民族が違えば考え方も変わるのかなど感心したり、史実と小説の虚構の部分が混同する怖れがあるのではと、心配になったりもした。

中国で明代に長編小説として完成した本が日本に渡来し、江戸時代以降民衆に各種のメディアを通じて広く親しまれ、長時間をかけ日本独自の小説や文芸を生み出した過程が理解できた。小説では、滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』、野村胡堂『銭形平次捕物控』に、更には、手塚アニメや青森のねぷた祭の図柄にまで影響が及んでいることに興味を覚えた。

本だけで輸入され、語学力や、情報不足から誤訳や勘違いもあった。例えば『西遊記』でブタをイノシシに間違えたり、沙悟浄がカップに変身したことなどは、ユーモラスで微笑ましいものに思えた。

また、『三国志』の名言の中で、「三顧の礼」、「泣いて馬謖を斬る」と言った熟語が日本製であることを教えてもらい、日本的感情から生まれた名言を誇らしく思う。

今回の企画展が基本書を中心とした構成で、展示終了後その多くは閲覧利用が可能とのことなので、私も、『三国志通俗演義』等いくつかを吉川英治の名訳と比較しながら読み（実際はながめる程度か）、楽しみたいと思っている。

大塚先生が言われているように、外来文化の受容一辺倒であった日本で 1980 年以降日本製アニメが中国、韓国、そして世界へと発信されているが、50年あるいは100年後、その国の独自の文化として、どんな形で発展しているか楽しみである。

我々ボランティアのために、この講演を開催していただいた大塚先生、大学図書館の職員のかたがたに対して、心から感謝とお礼を申し上げます。

平成 19 年度企画展：古地図の世界 ―世界図とその版木―

平成 19 年 10 月 1 日（月）～10 月 26 日（金）

平成 19 年春、日本を代表する世界図の完全な版木(16 枚 1 組・安政 2 年に作成された「重訂万国全図」を、大学南校（後の東京大学）が明治 4 年に改訂したもの）が附属図書館に寄贈された。このような地図の版木がほぼ原型のまま今日に伝わるということは大変珍しく貴重との事である。これを記念して、附属図書館が所蔵している諸種の世界図などを、第一部仏教系・中国系世界図、第二部ヨーロッパ系世界図として展示された。それとともに日本人の世界観が古代日本の三国世界観から、世界の中の日本という認識へと発展してゆく筋道も見てゆくことができる。また、日本最初の全国図とされる行基図から西洋の古地図を経て伊能図にいたる日本の形の変遷についての展示、間宮林蔵をはじめとする茨城県（常陸国・下総国）の生んだ地理学者・探検家の残した書物・地図などもあわせて展示された。

筑波大学附属図書館企画展「古地図の世界 ―世界図とその版木―

廣田紀代

平成 19 年 10 月 1 日から 26 日まで附属図書館企画展「古地図の世界 ―世界図とその版木―」が開催されました。この企画展は、明治維新直前の安政 2 年に発行された「重訂万国全図」を、明治 4 年大学南校（後の東京大学）が改訂した日本を代表する世界図の完全な版木のセット（16 枚 1 組）が、大学の附属図書館に寄贈されたことを記念して行われました。このような版木が現在までそのままの形で伝えられた事は、大変珍しく貴重な事だそうです。そこで、この版木と、筑波大学が従来から所蔵している、諸種の世界図などを一緒にして、古代から江戸時代末までの日本人の世界の見方（世界観）の変遷という点でまとめて、展観することにしたのだそうです。

この展示に関連して、人文社会科学研究所准教授大塚秀明先生の講演会がありました。

弥生時代・古墳時代の日本に住む一般の人々がどのような世界を思い描いていたかは解りませんが、弥生時代の人々は中国から渡ってきた人が多いという事ですから、なんとなく昔の記憶などがある程度は残っていたのではないかという気がします。勿論、支配階級などは当時でも中国との行き来があったのですから、海の遠い彼方の大きな土地・国のことは知っていたでしょう。印度から中国を通して仏教が伝わってきた古代には、世界の中央に須弥山が聳え、その東西南北に 4 大洲、東勝神洲、西牛賀洲、南瞻部洲、北俱盧洲が

あるという仏教的世界観が行き渡り、天竺は西に、中国は南に属していたという事のように、それは孫悟空の活躍する西遊記の世界でもありました。

日本最初の全国図（日本図）は奈良時代の僧・行基が作ったと言われている「行基図」です。山城国を中心に街道を描き、団子状の国々を連ねて、国々の位置関係を示しましたが、形は正確ではありませんでした。

戦国時代以後、日本に西洋人がやってきて、鉄砲を伝え、キリスト教を伝道するようになると、ヨーロッパ系の世界図と地理学知識が伝来しました。これによって世界には唐・天竺以外に南蛮などという土地が遠方にある事を庶民の末々まで知った事でしょう。徳川家康など支配層は唐・天竺などより遙かに遠い国からやってきた西洋人から、世界地図等を献上されて、かなり詳しい世界観を持つようになっていました。狭い窓ですが長崎でのオランダ人などとの接触を通じて、地図を含めて世界の最新情報に支配層が接していたのです。長屋の熊さん八つつあんなど庶民も、口では世界を唐・天竺の果てまでもなどと言いながらも、もっと広い世界を意識していたでしょう。キリシタン改めなどのあった時代です。

長崎を通じて遙かな西方を意識していた支配階級は、北方でのロシアの動き等に触発されて、蝦夷地の探検や地図の作成を行わせました。文化7年発行の「新訂万国全図」は間宮林蔵による間宮海峡の発見など、当時の最新知識を盛り込んだ世界屈指の地図でありました。これは安政2年に改訂され、さらに明治4年「重訂万国全図」は大学南校によって再び改訂されました。この地図の版木が筑波大学の所蔵となったのです。

この講演会はボランティアを対象としてのわかりやすい説明会でした。これに参加させていただき、古い時代の世界観の一端に触れられ、また限られた情報しかない江戸時代に、間宮林蔵の行ったような探検を行わせ、驚くべき正確さを持つ地図をこの時代に作成した徳川幕府の慧眼に心から驚嘆しました。

平成 21 年度特別展：日光 描かれたご威光 一東照宮のまつりと将軍の社参一

平成 21 年 10 月 5 日（月）～10 月 30 日（金）

筑波大学附属図書館と筑波大学大学院人文社会科学研究所歴史・人類学専攻の共催で開催された。

豪壮華麗な建築美を礼賛される日光東照宮には江戸幕府初代将軍徳川家康が祀られている。江戸時代には歴代の徳川将軍が十数回にわたり参詣した。将軍の参詣は日光社参と呼ばれ、きわめて大規模な国家的行事であった。日光社参に際しては、多様な記録・絵図が作成された。筑波大学には天保14年、12代将軍徳川家慶の日光社参に際し、通行する日光道中での警備のようすを描いた一連の「日光御参詣警固絵図」が所蔵されている。これらは前身校東京師範学校の時代に収集されたもので、徳川将軍の「ご威光」を示すだけでなく、周辺地域の歴史的景観・生活文化をも知ることができる。その他、「日光山修繕雑記」、「日光山図絵」、「日光御道中筋宿々里数」などが展示された。

「筑波大学附属図書館特別展」を見て思うこと

高田信江

平成7年度以来恒例になっている特別展。今回は「日光描かれたご威光」という特別展が開催されました。まず、驚いたのは、龍のお飾りが図書館の天井からつるされてあったことです。かわった飾り付けに心躍る気持ちがしました。今回の特別展の為に出版された冊子を手にしながらか会場をまわると、その冊子にえがかれた古地図の、整然と線引きされた将軍家慶日光社参の道や、宿城の宇都宮城や利根川房川渡の船橋の図、また日光東照宮、七里村の御小用所、上徳次郎宿の御小休所安養院、荒川の仮橋、江戸城竹橋門など、丁寧に描かれた絵地図が目を引きます。

この冊子によれば、日光山は、奈良・平安時代以降、勝道上人の開山縁起にみられるように、男体山を中心とした山岳信仰の道場として、さらに平安末から鎌倉時代以降には関東天台宗、日光修験道の聖地として発展したそうです。大きく発展したのは近世、徳川家初代将軍家康が東照大権現として勧請された元和3年(1617)以降のことと書かれています。将軍の威光を発揮する場として、ふだんは江戸への不審者の出入を監視するために橋がかけられていない荒川・利根川にかけられた巨大な仮橋と船橋。各地に用意された将軍専用の休憩施設のたたくまい。百人組が警固するなかを将軍が威風堂々と通行する道中の景観。そして百人組の組頭が将軍に御目見する場。これらは、いずれも見物人への見せ場でもありました。最近では、1949年建国した新生中国においては、建国記念日には、天安門広場で、軍事力を誇示するパレードが盛大におこなわれています。日本では、終戦記念日はおこなわれるけれども、権力を誇示する行進はみられません。その当時、将軍が進行する町場では、その住人が白砂をまき、箒や手桶を飾ることが命じられたそうです。それらは将軍の威光を示すためであったと指摘されています。将軍家慶の日光社参でも同様であったと書かれています。徳川家康の神柩は、元和3年(1617)4月に日光山に遷座され、東照大権現の神号を後水尾天皇から授与されて神となります。日光山志には「東より照さん世々の 日の光 山をうごかぬ ためしにハして」など東照社を礼讃する歌があると書かれています。また、俳聖松尾芭蕉も、元禄2年(1689)4月、奥の細道の旅に際して東照宮に詣で、「芭蕉翁奥の細道に、此御山を二荒山と書くを、空海大師日光と改給ふとそ。あらとうと青葉若葉の日の光り」と自然と人工美を礼讃したことが残されています。このように、歌と絵地図の両面から後世の人々に将軍の生活ぶりを伝える資料を残しながら将軍の行事がなされていたことはすばらしい事だと思いました。和紙や日本古来の染料をつかったとても手の込んだ作業が絵図から伺いしのおぶことができます。また、ボランティア作成の折り紙が展示品に彩りを与え、残存している伝承おりがみには、お籠とか、袴、刀などの昔の日本人の生活様式が残っていて、会場に明るい雰囲気を作りだしているのも、すばらしいことだと思いました。見ざる、聞かざる、言わざるの猿の折り紙も、日光をしのおぶ作品として興味深く拝見しました。職員のご努力とボランティアの創意工夫がとけあってとてもすばらしい、思い出に残る特別展でした。日本に育っても日本のことをよく知らない私のような日本人の為に、このような企画がなされることは、とても喜ばしいことです。

電子展示 Web ページの解説は特別展の開催を知らせるよい方法だと思いましたが、インターネットを検索しない人には、その情報は伝わりません。特別展などの情報を、一般の方々にも事前にお知らせする方法があれば、もっとよいのではないかと思います。

平成 23 年度特別展：日本人のよんだ漢籍 一貴重本と和刻本と一

平成 23 年 9 月 22 日（木）～10 月 21 日（金）

日本人が古代から長く読み続けてきた漢籍について、当館所蔵の貴重書と和刻本の中から代表的なものを選んで展示する。かな文字の出現より前から日本人は漢字に親しんできたわけであるが、その遠い時代から現在に至るまで全く同じ漢字という媒体を用い、多少の違いはあるかもしれないが、同じ文であれば変わらぬ解釈が出来るという漢語の力を感じさせられる。また、外国語である漢文を全く別系統である日本語で読み下していく独特の手法を考案したわれわれの祖先に、近代の日本経済の発展の仕方にも表れている力（それは一種の応用力といえるのではないか？）を見ることもできるのではないだろうか？

日本人のよんだ漢籍 一貴重本と和刻本と一を見て

太田恵理子

平成 23 年度の図書館特別展は、漢籍すなわち中国の書物とは言うものの、その全てが古くから我々の精神の奥深くに刻み付けられている（はずの）儒学や漢文学の基本的な書物の展示であった。

第 1 部は『聖賢のことば』として、経部つまり論語、孝経等及びその註釈書が展示された。国家を支える理念として中国のみならず周辺諸国に多大な影響を与えた儒学思想であるが、その受容の仕方には、意外に民族性が反映するようである。本展示に見られるように、わが国では中国語の語順をそのままに、返り点・送り仮名などを用いて日本語として訓読するという独自のシステムを採用した。はじめは「をこと点」などのようにオリジナルの本にこっそりしるしをつけるような感じだったのが、後には正々堂々とというかはっきりと返り点などをつけた印刷物が和刻本として現れたのであった（らしい）。どうせ新しく版を作って印刷をするのなら、訓読文とか翻訳にしまってよさそうなものなのだが、漢文に権威を持たせるためか、漢文に対する敬意の表れか、とにかく堅苦しい印象を受ける。

この儒教思想を国家宗教とした朝鮮王朝では、漢字をそのまま朝鮮漢字音で読んでいたようで、ハングルが発明されるまではかなりの教養をつんだものでないと読み書きは不可能であったらしい。われわれがもし漢字をお経のように音読したとしたらその意味するところは改めて学ばねばならず、きわめて非効率的な気がするのだが、かの国ではその方式を長く行ってきたようである。（野間秀樹「ハングルの誕生」平凡社新書参照）この点を見ても、わが国の訓読方式はなかなか優れているように思われる。学生の頃、中世ペルシア語でも、アラビア語の文献を訓読方式で読んでいたらしいという話を聞き、やはり人間の考える事は同じだなと思った記憶があるが、最近になって韓国を受容について知ってみると、同じものを受容するにしてもそれぞれの民族性があらわれるのかしらと改めて思ったことであった。もともとが同じ儒教思想から発しているも、四書五経などの古典はともかく、後代になってその国の儒者によって編まれた本もあり、高麗時代に編まれた「明心宝鑑」などのように朝鮮では盛んに学ばれたようだが、わが国にはあまり知られていないものがあることもこの頃知った。韓流時代劇を見てみると、せりふの中の四字熟語やら故

事成語のなかに、あるときは共通のものを、ある時はちょっと違うものを見つけて面白く思うこともある。また、同じ儒教を学んだ者たちが、朝鮮王朝を舞台にしたドラマで血で血を洗う派閥争いをしているのを見て（ある程度フィクションだとわかっている）「違うなー」と思ってしまうのは私だけだろうか。

第2部、『文は「文集」、「文選」』は集部に当たり、文選、白氏文集など、こちら我々に馴染み深い、古典文学にもたびたび登場する有名どころが展示された。枕草子を引くまでもなく、日本人にとっても基本的な教養であった漢文学の基本書であろう。いまや、高校でさえあまり漢文などに力を入れていないようなわが国であるが、それでも、頭の片隅に長恨歌の一節くらい引っかかっているのではないだろうか。展示の中では遊仙窟にも目を引かれた。同級生でこれを卒論に取り上げた強者(?)がいて、当時の無垢な女子学生は少々尊敬の念を覚えたのであった。

第3部の日本漢文学一斑では歴聖大儒像が印象深かった。湯島の聖堂の先聖殿に掛けられたものが伝来したものとのことであるが、狩野山雪の画に朝鮮通信使の金東溟が賛をつけたとのことで、異なる言葉の国の人々が漢字・漢文を通して分かり合えるというちょっとしたリングア・フランカ的な働きをする（その中に多少、文化の高きから低きへの流れみたいなものを感じはするが）漢文そして儒教に感動を覚えた。あの煩雑な漢字を外国人が会得し、自在に繰り、意思の疎通も果たすというのはすばらしいことではあるまいか？

もうひとつ、この展示に花を添えたのは、豹軒鈴木虎雄博士の関係資料の展示である。京都大学でなくなぜ筑波大にという疑問も浮かんだが、理由を聞けば納得、貴重な資料を寄贈してくださったご子孫の方に心から感謝の意を表するものである。

平成24年度特別展：

明治時代に礼法はいかにして伝えられたか —出版メディアを中心に—

平成24年10月1日（月）～10月31日（水）

筑波大学開学40+101周年記念事業のプレ企画として開催された特別展。明治時代の女子教育において重要な位置を占めていた礼法教育について、江戸時代から明治時代にかけて作成された礼法関係資料（小笠原流礼法書や師範学校・教育大学の歴史を持つ筑波大学ならではの礼法教科書など）が展示された。礼法という「情報」がどのような「メディア」（書籍、錦絵等）を通して人々に伝えられたかを視覚的に理解できるように配慮されていた。その中には今回初公開の「礼法関係錦絵」も含まれる。又、図書館におけるマナーというものが礼法書にどのように記されていたかという図書館ならではの展示も興味深い。

図書館特別展「明治時代に礼法はいかにして伝えられたか」を見学して

太田恵理子

10月1日から31日まで、今年も例年通り図書館特別展が開かれた。昨年の震災後、混乱の中にあっても、関係者のご尽力でつつがなく開催され、筑波大学の底力を垣間見た気がしたが、今年の特別展も礼法の歴史とその伝えられ方というユニークな切り口の展示で、その資料の豊かさとともに一見の価値のあるものとなっている。

個人的に最も興味を引かれたのは最初に展示されている「兵法首実検伝書」であった。元禄15年(1702)写のこの資料には、「敵将を生捕りにして誅し首実検する」作法が事細かに書き記されていて、沐浴させ髪を逆結びにするところから、最後の一献として大根の香の物などとともに酒を飲ませること、首の切り方、その実検法から首桶のサイズまで、まことに念のいったものである。江戸時代も半ば、時は元禄15年、赤穂義士の事件などはあったものの、幕藩体制は安定し町人文化も興隆して平安な世に、敵将を生捕りし首実検をするなど、およそ実用には程遠いと思わざるを得ないが、これこそが礼法のみならず家元制度的なシステムのよって立つところかと感心した。どんなことにもこまごまと作法をつくっていくのが一種のガラパゴス化のように見えるのは私だけなのだろうか？そして、礼法のような本来無形の精神的な部分から発するものも、「伝授」という体系に組み込まれれば、様々なレベルの伝授法が考案され、上は將軍家から武家への普及、そして明治になってからは一般大衆の教育の一部となって、一子相伝・奥義伝授・口伝などのようにきわめて個人的なものから、学校教育の項目のひとつとなって広範に伝えられるようになっていくのだが、この家元制度的な伝授のシステムはひとり日本だけのものなのだろうか？同じく儒教的な価値観を根底に持っていると思われる中国や朝鮮にもこのような伝授のシステムは成立していたのだろうか？浅学菲才の身には皆目見当が付かない。

などと、1番目の文字資料に随分興味を惹かれてしまったのだが、今回の展示の目玉は美しい「礼法関係錦絵」の初公開であろう。明治になって、学校教育に修身の項目が入り、それまでの武家礼法からあらたに女子の礼法教育に着目した小笠原清務の目端の利き方たるや驚くべきものがある。江戸末から明治のはじめ頃の普通の日本人の様子を見聞した外国人はその清潔さや行儀に驚嘆したとか。そんなことを考えてみれば、いまさら学校教育の項目として修身を取り上げる必要はなかったようにも思われるが、礼法が学校教育でとりあげられることによる波及効果こそがこのような「礼法関係錦絵」や礼法関係書籍の発行となってあらわれたのであろう。こんなところにも日本人的な形式好きを感じてしまう。どの錦絵も女性のたしなみをさまざまに描いているのだが、講演でうかがって面白かったのは、琴を弾く女性の姿である。先生のお話では実際には絵のような姿で琴を弾くことはないのだそうだ。つまり、絵師たちは実際に自分が見聞して描いたのではなく、たぶんイメージで或いは何らかの情報をもとに描いたのらしい。ひとつの絵の中に水仙の水盤・緑の芭蕉・紅葉したもみじと一緒に描かれているのも、この錦絵が現実を描写したのではないこと



いことのアラわれであろう。どの錦絵も様式的だがきわめて美しく描かれていて色彩もよく保存されている。今回の展示はもう終了してしまったが、機会があれば、またあの美しい錦絵をゆっくり拝見したいと思っている。

図書館ボランティアについて

図書館ボランティア

筑波大学は開かれた大学として地域社会との融和を図っております。その努力の一つとして 1995 年 6 月 1 日には全国の国立大学に先駆て図書館ボランティア制度を発足させています。

図書館ボランティアはつくば市およびその周辺に住む家庭の主婦、定年退職者などから選ばれており、現在約 50 名近くの図書館ボランティアが活動しています。いずれも生涯学習に大きな関心を持ち、ボランティア活動に熱心であり、豊かな人生経験と教養を備えた人々であります。図書館ボランティアはその活動を通じて、開かれた大学としてのイメージを高め、図書館サービスの向上に、地域社会との融和に貢献しております。

図書館ボランティアはおもに中央図書館で活動し、2階・4階ボランティアカウンターを定位置としております。

その主な活動は：

1) 図書館総合案内

館内窓口案内、資料配置案内、資料探索案内、端末機操作案内、各種申込記入案内、身体障害者や日本語に不慣れた外国人へ図書館利用支援

2) 対面朗読

視覚障害者のための対面朗読、館内での資料探索支援。

3) 利用環境整備

中央図書館及び体育・芸術図書館各階の書架の整理、図書の修理、図書ラベルの貼り直し、など利用者が使いやすい環境を整える。

4) 体育・芸術関係資料の整理

美術展ポスターなどの整理。

5) その他

外国人のための日本文化紹介、留学生オリエンテーションの補助、図書館見学案内。

などです。

上記 1) 図書館総合案内および 3) 利用環境整備のため、図書館ボランティアは毎週、月～金の 5 日間、午前のシフト (10 時～13 時)、午後のシフト (13 時～16 時) に分かれて活動しています。

視覚障害のある方には上記 2) 対面朗読など、訓練されたボランティアによる支援を行っています (予約が必要)。

留学生の皆さん、図書館を利用されるにあたって、わからないことがあれば、ご遠慮なく図書館ボランティアに相談してください。

図書館ボランティアは喜んでお手伝いします。

May, 2006

ON THE LIBRARY VOLUNTEERS

Prepared by Volunteer

The University of Tsukuba has been maintaining its policy to be friendly to the public, and maintain good relationship with the local community. As one of its efforts toward that objective, the University took a lead to adopt a library volunteer system. The system was started on the first of June 1995, which was said to be the first one among the national universities in Japan.

The number of library volunteers is nearly 50 persons. The system is mainly organized with housewives and retired persons who are living in Tsukuba City and its vicinity. They are having a continued interest on life-long learning, and are well experienced in their lives with good common sense.

It is believed that efforts of these volunteers have contributed for maintaining friendly images of the University and good relationship with local community. Furthermore it brought a lot of improved services of the Library as well.

The library volunteers are generally stationed on the 2nd and 4th floor of the Central Library of the University. Their major missions are:

- 1) General Information Service on the Library:
on general information, on document layout information, assist document search, assist PC-terminal operation, assist filling out various application forms, assist handicapped persons and foreign visitors
- 2) Assist Sight -handicapped Persons:
assist document retrieval and readout these for them
- 3) Maintain Library Environment (Shelf Reading):
check arrangement of books on shelves and their "call number tags" (light maintenance work on books to keep the library environment friendly to users)
- 4) Restore Materials in the Arts and Physical Education Library:
- 5) Others:
introduce Japanese cultures to foreigners, assist library orientations for foreign students, library tour guide

On weekdays, from Monday through Friday, the service of volunteers is done in two shifts, that is, morning shift (10:00 to 13:00) and afternoon shift (13:00 to 16:00).

For sight-handicapped persons, services by specially trained volunteers for the above item 2 is available when requested. (Reservation is needed.)

Whenever any question comes out in your mind, please feel free to contact volunteers at the Volunteer Counter on the 2nd and 4th floor. They are willing to help you.

うたがき

筑波大学附属図書館ボランティア広報紙

第21号

図書館の特別展・企画展

平成25年3月発行

編集：筑波大学附属図書館ボランティア広報部

発行：筑波大学附属図書館

〒305-8577

茨城県つくば市天王台1-1-1

TEL:029-853-2348（情報管理課）